

「どうだ？」

「えと……今の、キス……だよね？」

「ああ」

「わ……ロマーリオとキス、しちゃった」

ディーンノの頬がポツと薔薇色に染まる。

「夢じゃないって、実感出来たか？」

「ん……出来たけど、まだ夢見てるような、そうでないような、何か不思議な気分」

「じゃあ、今度はもっと長くて大人のキスをしよう」

「うん……」

今度はロマーリオに言われるより先に目を閉じ、

ロマーリオの唇を待つ。

ディーンノの唇にロマーリオの唇が軽く触れ、それが二、三度繰り返されると、今度は唇と唇がしっかりと重ねられる。

同時にディーンノの腰にロマーリオの両手が回され、抱き寄せられた。

ディーンノは髭が鼻の下にチクチク当たるのをこそばゆく感じながら、ロマーリオのシャツの裾をキュッと掴んだ。

閉じた唇を舌先でチョン、チョンとノックされ、

おずおずと口を開くと、そこからロマーリオの舌が侵入してきた。

自分以外の舌の感触に戸惑っていると、ロマーリオの舌が自分の舌に擦り付けられゆっくりと動き出す。

ディーンノはどうしていいか分からず、微かにコーヒーの味が残るロマーリオの舌にされるがままになっていた。

「ん、んうっ……」

しばらく舌と舌を擦り合わせていると、ディーンノが苦しそうな呻き声をあげながらロマーリオの胸をポカポカ叩いた。

「どうした？」

唇を離し、やはり触れるだけのキス以上の事をするのはまだ早かったかと、涙目になっているディーンノの様子を窺う。

「息、出来なくて苦しくて……」

「鼻で息すりゃいいだろ」

「あ、そっか」

「ハハハ……お嬢さんらしいな。そんなじゃもう一回するか？」